

蒙古語における **uɣa* と **üige* の母音縮合¹⁾

栗 林 均

序

ウイグル字をもって蒙古語を綴るいわゆる蒙古文語は、12世紀から13世紀にかけてのチンギス汗の時代に成立して以来、今世紀に至るまで700年以上にわたって蒙古族の書きことばとして用いられてきた。こうした長い時間の流れのなかで、蒙古文語もまたその字形や語彙、語法などに少なからぬ変化を蒙らずにはいなかったが、同時に書記言語としての保守性から、そこには多かれ少なかれ成立当時の蒙古語口語の状態を反映すると考えられるきわめて古風な言語的特徴が保持されてきたこともまた事実である。

現代蒙古語の長母音に対応する蒙古文語の正書法は、そのような古風さを示す代表的な特徴のひとつに数えられる。周知のように、ハルハ、オールドス、カルムイク、ブリヤート等現代蒙古語諸方言の長母音に対して、蒙古文語では多くの場合、次のように *VɣV* ないし *VgV* の連続が対応している (*V* は母音字をあらわす) :

<i>mo.</i> ²⁾	<i>kh.</i> ³⁾	
<i>baɣatur</i>	<i>bātar</i>	《英雄》
<i>aɣula</i>	<i>ūl</i>	《山》
<i>degere</i>	<i>dēr</i>	《上に》

1) 本稿は、1983年5月21日に早稲田大学で開催された日本モンゴル学会春季大会における研究発表の草稿をもとに、加筆・補正したものである。

egür üür 《巢》
etc.

このような、現代口語の長母音と蒙古文語に特有な正書法との対応には、早くから研究者の関心が向けられ、これは長らく、蒙古語における「長母音の派生」をあらわす現象として説明されてきた。すなわち、現代蒙古語の長母音は、蒙古文語に反映されている状態、すなわち $V\gamma V \sim VgV$ という音連続から、母音間の子音 γ, g が弱化・消失して、二つの母音がひとつの母音に縮合する過程で二次的に派生したものとみなされてきた。⁴⁾

ところが、つとにウラディーミルツォフが指摘しているように、蒙古文語の $V\gamma V$ と VgV の連続がすべて現代口語の長母音に対応しているわけではない。蒙古文語の母音間の γ, g に、ハルハ方言の喉子音が対応している例も決して少なくないのである。⁵⁾

-
- 2) mo. = 蒙古文語。蒙古文語形はおもに
F. D. Lessing et al., *Mongolian-English Dictionary*, corrected rpt.,
Bloomington, Indiana, 1973. による。ただし転写方式は
N. Poppe, *Grammar of Written Mongolian*, Wiesbaden, 1954. に従
った。
- 3) kh. = ハルハ方言。ハルハ方言形は
А. Дувсандэндэв «Монгольско-русский словарь» Москва, 1957. によ
ってローマ字転写した。
- 4) G. J. Ramstedt, "Das Schriftmongolische und die Urgamundart pho-
netisch verglichen", *Journal de la Société Finno-ougrienne* XXI: 2,
1903, S. 21-23.
Б. Я. Владимирцов «Сравнительная грамматика монгольского пись-
менного языка и халхаского наречия, Введение и фонетика» Ленинград,
1929, стр. 192-203.
Г. Д. Санжеев «Сравнительная грамматика монгольских языков, Том
1» Москва, 1953, стр. 77-80.
N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Mémoires
de la Société Finno-ougrienne 110, Helsinki, 1955, pp. 59-76.
- 5) Владимирцов, указ. соч., стр. 222-237.

たとえば：

mo.	kh.	
<i>baɣa</i>	<i>baga</i>	《小さい》
<i>daruɣa</i>	<i>darga</i>	《長、 ^{かしら} 頭》
<i>egel</i>	<i>egel</i>	《普通の》
<i>sibüge</i>	<i>šöböḡ</i>	《錐》
<i>etc.</i>		

ウラディーミルツォフは上のようなハルハ方言のあらわれを「長母音形成の音変化の例外」とみなしたが、のちに服部四郎およびポッペ両氏は、それを喉子音に続く母音の長さの違いによる条件的音変化の結果とみなす考え方をそれぞれ独自に発表した。⁶⁾つまり、蒙古文語の *ɣ*, *g* に対応する蒙古祖語の喉子音は、元来、それに続く母音が長母音だった場合に消失し、それ以外の場合には保持された、という説明である。

* *baɣätur* → *ba'ätur* → *bätar*
 * *baɣa* → *baɣa* → *baga*

このような観点からすれば、現代蒙古語の長母音は母音の長さという点において蒙古祖語の特徴を受け継いでいるとみなすこともできるわけであるから、これを「二次的」ないしは「派生的」長母音と呼ぶのは必ずしも当らないことになる。しかし、蒙古祖語における長母音の存在を既に論証されたものとして認めるにせよ、あるいはそれに対して懐疑的な立場をとるにせよ、⁷⁾ いずれにしても、上述の現代蒙古語の長母音が二

6) 服部四郎「蒙古祖語の母音の長さ」『言語研究』36号、1959、40-54頁。

N. Poppe, "On the Velar Stops in the Intervocalic Position in Mongolian" *Ural-Altische Jahrbücher* 31, 1959, pp. 270-273.

7) G. Doerfer, "Langvokale im Urmongolischen?" *Journal de la Société Finno-ougrienne* 65, 1964, pp. 3-21.

— "Langvocale im Urmongolischen? II" *Journal de la Société Finno-ougrienne* 70, 1970, pp. 3-24.

つの音節の母音の縮合変化 (contraction) を経て得られたものであるという点については疑問の余地はない。

本稿では、蒙古文語の *uγa* と *üge* の連続に対応する現代蒙古語の長母音の歴史を母音縮合の観点から検討しようとするものであるが、その際、母音間の喉子音の消失の問題——すなわち、蒙古祖語における長母音の問題には敢えて立ち入らない。これは、母音間の喉子音の弱化・消失と、二つの音節の母音の縮合とをそれぞれ独立した音変化とみなすがゆえに他ならない。

1. 問題の所在

蒙古文語の *VγV* ~ *VgV* の連続と現代口語の長母音との対応をみると、現代口語の長母音としてあらわれている母音は、一般に、*VγV* ~ *VgV* の連続の前後いずれかの母音と質的に一致している。次のような対応を参照。

1) 蒙古文語で前後の母音が同じ場合

mo.	kh.	mo.	kh.	
<i>aγa</i>	<i>ā</i>	<i>baγatur</i>	<i>bātar</i>	《英雄》
		<i>saγadaγ</i>	<i>sādag</i>	《矢筒》
<i>uγu</i>	<i>ū</i>	<i>buγura</i>	<i>būr</i>	《牡駱駝》
		<i>quruγu</i>	<i>xurū</i>	《指》
<i>ege</i>	<i>ē</i>	<i>degere</i>	<i>dēr</i>	《上に》
		<i>tegerme</i>	<i>tērem</i>	《挽き臼》
<i>ügü</i>	<i>ü</i>	<i>tügükei</i>	<i>tūxi</i>	《 ^{なま} 生の》
		<i>küγügün</i>	<i>xiüdzü</i>	《首》

2) 蒙古文語で前後の母音が異なる場合

mo.	kh.	mo.	kh.	
<i>aγu</i>	<i>ū</i>	<i>aγula</i>	<i>ūl</i>	《山》
		<i>qataγu</i>	<i>xatū</i>	《固い》
<i>egü</i>	<i>ū</i>	<i>egür</i>	<i>ūr</i>	《巢》
		<i>jegün</i>	<i>dzü</i>	《針》
<i>oγa</i>	<i>ō</i>	<i>toγa</i>	<i>tō</i>	《数》
		<i>toγarai</i>	<i>tōroi</i>	《ポプラ》
<i>oγu</i>	<i>ō</i>	<i>oγusur</i>	<i>ōsor</i>	《紐》
		<i>toγuno</i>	<i>tōno</i>	《 ^{パイ} 包の煙 出し穴》
<i>öge</i>	<i>ō</i>	<i>ögede</i>	<i>ōd</i>	《上へ》
		<i>bögere</i>	<i>bör</i>	《腎臓》
<i>ögü</i>	<i>ō</i>	<i>čögüken</i>	<i>tsöxög</i>	《少ない》

そして、上のような母音縮合はハルハ方言に限らず、オルドス、カラムイク、ブリヤート等の諸方言においても同様である。

ところが、このような対応を組織的に調査したウラディーミルツォフによれば、蒙古文語の *uγa* と *üge* の連続に対してだけは、次のようにハルハ方言でそれぞれ2種類の長母音が対応している。⁸⁾

	mo.	kh.	mo.	kh.	
1°	<i>uγa</i>	<i>ō</i>	<i>doluγan</i>	<i>dolō</i>	《七》
			<i>γiluγa</i>	<i>dolō</i>	《手綱》
			<i>γiruγa</i>	<i>džorō</i>	《側対歩》 ⁹⁾

8) Владимирцов, указ. соч., стр. 196-197. 一部例を補った。

9) 馬が、片側ずつ足をすすめる走り方。

	mo.	kh.	mo.	kh.	
2°	<i>uṛa</i>	<i>ā</i>	<i>ḷirṛuṛan</i>	<i>dzurgā</i>	《 六 》
			<i>ṛaruluṛa</i>	<i>garlā</i>	《 出 た 》
			<i>yabuṛad</i>	<i>jawād</i>	《 行 っ て 》
1°	<i>üge</i>	<i>ö</i>	<i>ergüge</i>	<i>örgö</i>	《 本 營 》
			<i>irügel</i>	<i>jöröl</i>	《 祝 福 》
2°	<i>üge</i>	<i>ē</i>	<i>irelüge</i>	<i>irlē</i>	《 来 た 》
			<i>engkürüged</i>	<i>eḡxrēd</i>	《 可 愛 が っ て 》

蒙古文語の *uṛa* (*üge*) という転写形がハルハ方言のより古い発展段階を反映しているとすれば、同じ音連続がなぜハルハ方言で二種類の異なった長母音としてあらわれるに至ったのか、それぞれの音声的環境の違いを明らかにせねばならない。言語史において、ひとつの音（連続）が何の条件もなく二つ以上の音（連続）に分化するというような、恣意的な分裂変化は考えられないからである。¹⁰⁾

これに関して、ウラディーミルツォフ¹¹⁾、ポッペ¹²⁾、およびトムセン¹³⁾は、すでにそれぞれの解釈と説明を提示している。本稿の目的は、それら諸先学の説明を検討してそれぞれの問題点を明らかにしたうえで、若干の新しい考え方を含む私見を提示することにある。その際、先学が一樣に前提としている蒙古文語の *uṛa*, *üge* という転写形、あるいは

10) A. Meillet, *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, Paris, 1937⁸, p. 472.

11) Владимирцов, указ. соч., стр. 196-197.

12) N. Poppe, "The groups **uṛa* and **üge* in Mongol languages", *Studia Orientalia* XIV : 8, 1950.

13) K. Thomsen, "Die Entwicklung der Gruppe **uṛa* (**üge*) im mongolischen", *Acta Orientalia* 23, 1958, S. 263-267.

**uɣa*, **üge* という再構形の妥当性をも検討の対象とするものである。¹⁴⁾

2. ウラディーミルツォフ説の検討

2.1. 「前進的円唇同化」説

ウラディーミルツォフは、蒙古文語の状態がハルハ方言のより古い発展段階を反映しているという前提にたつて、*uɣa* (*üge*) に対応するハルハ方言の二種類の長母音を、第1音節の母音の影響による分岐的音変化として説明しようとした。すなわち、氏によれば、

$$1^\circ \quad u\gamma a > \bar{o} \quad (\ddot{u}ge > \bar{\ddot{o}})$$

$$2^\circ \quad u\gamma a > \bar{a} \quad (\ddot{u}ge > \bar{e})$$

というハルハ方言の2通りの音変化のうち、 $1^\circ \quad u\gamma a > \bar{o} (\ddot{u}ge > \bar{\ddot{o}})$ という母音縮合は、この方言で第1音節の母音 *o* (*ö*) に後続する音節で、それに同化することによって生じた条件的音変化——以下これを「前進的円唇同化」と呼ぶ——である。¹⁵⁾

確かに、ハルハ方言では、第2音節以降の長母音 \bar{o} ($\bar{\ddot{o}}$) は、第1音節の母音 *o*, \bar{o} , *oi* (*ö*, $\bar{\ddot{o}}$, *öi*) に後続する音節にしかあらわれていないので、この点では上の説明は説得力がある。しかしながら、蒙古文語の第1音節に《*i*》がある次のような場合には、「前進的円唇同化」の説明はひとつの困難が避けられない：

14) したがって、本稿の表題に「**uɣa* と **üge* の母音縮合」とあるのは、従来そのようなものとして論じられてきた現象をとりあげるといふ以上に、筆者がそのような再構祖形をアプリアリに受け容れていることをも意味するものではない。

15) Владимирцов, указ. соч., стр. 197. *uɣa* (*üge*) の *u* (*ü*) が第1音節に属す場合は稀である。以下、特にことわりのない場合は、*u* (*ü*) が第2音節以降に属している場合を扱う。

mo.	kh.	
<i>ǰilɣa</i>	<i>dʒolō</i>	《手 綱》
<i>ǰiruɣa</i>	<i>dʒorō</i>	《側対歩》
<i>irügel</i>	<i>jöröl</i>	《祝 福》
<i>čilügen</i>	<i>tšölō</i>	《 暇 》
etc.		

問題は、上掲のハルハ方言の第1音節の母音に関するものである。いわゆる「**i*の折れ」は、第1音節の母音 **i* が現代蒙古語では直後に続く音節の母音に同化する一般的な現象であるが、上の場合、「前進的円唇同化」の説明によれば第1音節の *o* (*ö*) が後続する長母音 *ō* (*ȫ*) の影響による「折れ」として説明することはできない。なぜなら、第2音節の長母音 *ō* (*ȫ*) は、第1音節の母音 *o* (*ö*) の影響のもとに生じたのであるから、第1音節の母音 *o* (*ö*) と第2音節の長母音 *ō* (*ȫ*) の成立の順序が「折れ」の説明と逆になってしまうからである。

したがって、「前進的円唇同化」の説明を堅持しようとする限り、上掲のハルハ方言の単語で、まずもってどのようにして第1音節の *o* (*ö*) が得られたのかを明らかにしなければならない。これに関するウラディミルツォフの説明は決して単純でない。氏の著書の異なった箇所述べられている説明を要約すれば次のようになる。

第1の説明は、蒙古文語の第1音節の《*i*》が必ずしもハルハ方言の祖形としての **i* を反映していない、というものである。¹⁶⁾ たとえば、ハルハ方言の *dʒorō* 《側対歩》に対応する蒙古文語形 *ǰiruɣa* の第1音節の《*i*》は祖形の **i* を反映するものでなく、この語はより古い状態で第1音節に母音 **o* を有していたという。

mo. *ǰiruɣa* = **ǰoruɣa* > *dʒorō*

16) Владимирцов, указ. соч., стр. 185-189.

第2の説明は、「特殊な*i*の折れ」を仮定するものである。¹⁷⁾ それによれば、蒙古文語で第1音節の*i*が第2音節の母音u, *ü*に先行して、しかもそれ(*i*)が絶対語頭に位置するか、語頭子音 *ǰ*, *č*, *s*~*š*に続いている場合には、次のような二通りの「折れ」が生じたという。

1) *dz* (<*ǰ*), *ts* (<*č*) という語頭の非口蓋化子音にともなう折れ:

i > *u*, *ü*.

2) *dž* (<*ǰ*), *tš* (<*č*), *š*, *j* 等、語頭の口蓋化子音にともなう折れ:

i > *o*, *ö*.

これらのうち、後者の折れは、「逆行同化」という観点からすれば、後続音節の母音(*u*, *ü*)とは異なった母音が第1音節に得られている点で「特殊な折れ」とみなすべきであるが、ハルハ方言の *džolō* (<**ǰilura*), *jöröl* (<**irügel*), *tšölō* (<**čilüge*) 等の第1音節の母音(*o*, *ö*)はこのような折れによって得られたものであるという。

しかしながら、ここに、ハルハ方言が蒙った「脱・口蓋化」の音変化を考慮に入れるならば、上のウラディーミルツォフのいずれの説明も成り立ち難いことが明らかになる。

ハルハ方言では、蒙古文語の *ǰ* と *č* に対応する口蓋化子音 (**dž*, **tš*) は、それらに母音 **i* が後続している場合を除いて、非口蓋化子音 *dz*, *ts* となる「脱・口蓋化」の変化を蒙ったことが知られている。¹⁸⁾

したがって、現代ハルハ方言に保存されている口蓋化子音 *dž* と *tš* は、それらがより古い状態で母音 **i* に先行していた——つまり **dži*, **tši* の音連続をもっていた——ことの徴証となりうる。こうして、ハルハ方言形 *džorō* をみると、語頭の口蓋化子音 *dž* は、この語の第1音節に母音 **i* が存在していたことを示しているのである。つまり、蒙古文語形

17) Владимирцов, указ. соч., стр. 181-184.

18) N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki, 1955, pp. 110-119.

jiruya の第1音節の《*i*》は、ハルハ方言の祖形をよく反映しているとみなすべきであって、祖形を **joruya* とするウラディーミルツォフの説明は誤りとせねばならない。¹⁹⁾

第2の説明についても、1)の折れが「非口蓋化子音」にともなっており、2)の折れが「口蓋化子音」にともなっていることを考えれば、両者は「脱・口蓋化」の音変化をはさんで時代的に異なった別種の折れであることがわかる。つまり1)では、語頭に非口蓋化子音 (*dz, ts*) があることから、「脱・口蓋化」の音変化に際してこれらの語では既に第1音節で折れが生じて **i* 以外の母音が得られていたと考えなければならない。そして2)では、語頭に口蓋化子音 (*dʒ, tʃ*) が保存されていることから、「脱・口蓋化」に際して未だ母音 *i* が保存されていた(「折れ」は生じていなかった)とせねばならない。²⁰⁾

要するに、ウラディーミルツォフのいう1)と2)の折れは、同一の時代に属する条件的音変化ではなく、時代的に異なった全く別種の音変化とみなすべきである。したがって、2)の折れ (*i > o, ö*) に際して、第2音節の母音が *u, ü* であったというウラディーミルツォフの説明は根拠を失うことになる。

結局、*i > o (ö)* という折れが生じた際に、第2音節の母音が *u (ü)* だったのか、あるいは *ö (ö)* だったのかは、確かな決め手はない。ただ、「前進的円唇同化」の説明を堅持する立場をとる限り、前述のような「特殊な折れ」を仮定しなくてはハルハ方言の *džolō, jöröl* 等の第1音節の母音の由来が説明できないということである。

これに対して、「*i*の折れ」を単純な逆行同化現象として規則的にとらえようとする立場からすれば、そのような「特殊な折れ」を仮定せずに

19) **joruya* という祖形からハルハ方言に期待される形は **dzorō* である。またオルドス方言形 *džirō* «側対歩» も第1音節の **i* を支持している。

20) 拙論「蒙古語史における『**i*の折れ』の問題点」『言語研究』82, 1982, 37-40頁。

は済まない「前進的円唇同化」の説明をこのままの形で受け容れることはできないことは明らかである。

2.2. カルムイク方言形の位置づけ

ウラディーミルツォフの「前進的円唇同化」説は、ハルハ方言とならんでカルムイク方言のあらわれをも同時に（統一的に）説明することをめざしたものであった。

カルムイク方言では、ハルハ方言の第2音節以降の長母音 \bar{o} と $\bar{\bar{o}}$ に対してそれぞれ平唇母音 \bar{a} と $\bar{\bar{e}}$ が対応している：

mo.	kalm. ²¹⁾	kh.	
<i>doluyan</i>	<i>dolān</i>	<i>dolō</i>	《 七 》
<i>žiluya</i>	<i>džolā</i>	<i>džolō</i>	《 手 綱 》
<i>žiruya</i>	<i>džorā</i>	<i>džorō</i>	《 側 対 歩 》
<i>irügel</i>	<i>jörēl</i>	<i>jöröl</i>	《 祝 福 》
<i>čilügen</i>	<i>tšölē</i>	<i>tšölō</i>	《 暇 》
<i>etc.</i>			

ウラディーミルツォフによれば、このようなカルムイク方言のあらわれは、この方言で「前進的円唇同化」が生じなかった結果である。つまり、氏は *uɣa* > \bar{a} (*üge* > $\bar{\bar{e}}$) という縮合変化を、ソシュールのいう自生的な (spontané) 音変化²²⁾ とみなしていたことは明らかである。

それだからこそ、氏はカルムイク方言形の *dolān* が長母音 \bar{a} をもっ

21) kalm. = カルムイク方言。出典は

G. J. Ramstedt, *Kalmückisches Wörterbuch*, Helsinki, 1976 (rpt.)
による。

22) 他の音韻の影響による結合的变化に対して、内的原因によって生じた変化。

F. de Saussure, *Cours de linguistique générale*, Paris, 1949³, p. 199;
小林英夫訳『一般言語学講義』1972, 203頁。

ていることを根拠として、祖語に **doloŋan* ではなく、**doluŋan* と **uŋa* の音連続を推定するのである。²³⁾ もしも、祖形が **doloŋan* だったとしたら、カルムイク方言でも *dolōn* という形が得られていただろう、と氏は書いている（蒙古文語の *toŋa* 《数》に対するカルムイク方言形が *tō* 《数》であることを参照）。

これに関連して、かつてポッペはカルムイク方言形 *džolā* 《手綱》, *džorā* 《側対歩》等の長母音 *ā* がウラディーミルツォフのいうようにハルハ方言の *džolō*, *džorō* より古い発展段階をあらわすものではなく、むしろより新しい現象だとする考え方もありうることを示した。²⁴⁾ つまり、カルムイク方言の *džolā*, *džorā* 等の長母音 *ā* は、ハルハ方言形 *džolō*, *džorō* の段階から、第2音節以降の長母音 *ō* が円唇的特徴を失なう（「脱・円唇化」）ことによって得られたとする考え方である。

このような考え方は、ハルハ方言形 *džolō*, *džorō* 等の第1音節の *o* (<**i*) が第2音節の長母音 *ō* の影響によって生じた（「折れ」）ということを前提としている。ただし、その前提は無条件に受け容れられていて、それになんらかの積極的な根拠が示されていないことは指摘しておく必要がある。

そこで、筆者はここに、ハルハ方言の *džolō*, *džorō* 等の第1音節の母音 *o* が第2音節の長母音 *ō* の影響によって生じたとする考え方を支持するひとつの事実を提示したい。それは、ハルハ方言と歴史的に緊密な関係にあると考えられるオルドス方言の対応である。オルドス方言で

23) Владимирцов, указ. соч., стр. 316.

24) N. Poppe, "Stand und Aufgabe der Mongolistik", *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 100, 1950, S. 73.

この考え方は、のちにトムセンによって祖述され、ひとつの仮説が提示されることになるが（後述, 4. 参照）、ポッペ自身によってはもはや廃棄されているようにみえる。

cf. N. Poppe, *Introduction to Altaic Linguistics*, Wiesbaden, 1965, p. 7f.

は、蒙古文語形 *jilura* 《手綱》, *jirura* 《側対歩》 に対して、次のように第1音節の母音 *i* が保存された形が対応している。

mo.	ord. ²⁵⁾	kh.	kalm.
<i>jilura</i>	<i>džilō</i>	<i>džolō</i>	<i>džolā</i> 《手 綱》
<i>jirura</i>	<i>džirō</i>	<i>džorō</i>	<i>džorā</i> 《側対歩》

オルドス方言では第1音節の母音が *i* であることから、第2音節の長母音 *ō* が「前進的円唇同化」と無関係に生じていることは明らかである。したがって、オルドス方言をも含めた三方言の対応を余すところなく、しかも一貫して説明しようとするれば、オルドス方言の状態が現代三方言に共通のより古い発展段階を反映しているとみなして、次のような音変化を仮定するのが最も妥当であると考えられる。

- ① 「*i* の折れ」: $i \rightarrow o / _ Cō$ (ハルハ, カルムイク両方言に共通の音変化)
- ② 「脱・円唇化」: $ō \rightarrow ā$ / 第2音節以降で (カルムイク方言独自の音変化)

オルドス方言では、上述のような構造をもつすべての語で第1音節に母音 *i* が保存されているわけではないので、上の例は特に重要である。次に関与的な例を列挙してみよう (星印のついた形は上のような推論をへて推定される三方言に共通の祖形)。

mo.		ord.	kh.	kalm.
<i>irurar</i>	* <i>irōl</i>	<i>irōl</i>	<i>jorōl</i>	<i>jorāl</i> 《 底 》

25) ord. = オルドス方言。出典は

A Mostaert, *Dictionnaire Ordos*, New York / London, 1968 (rpt.)
によるが、一部表記を単純化した。

mo.		ord.	kh.	kalm.	
<i>siru</i> ya	* <i>šir</i> ō	<i>šor</i> ō	<i>šor</i> ō	<i>šor</i> ā	《土》
<i>kirü</i> ge	* <i>kir</i> ō	<i>kör</i> ō	<i>xör</i> ō	<i>kör</i> ē	《鋸》
<i>jitü</i> gen	* <i>džit</i> ōn	<i>džöt</i> ō	<i>džöt</i> ō	<i>džüt</i> ēn ²⁶⁾	《ねたみ》
<i>čilü</i> gen	* <i>tšil</i> ōn	<i>tšöl</i> ō	<i>tšöl</i> ō	<i>tšöl</i> ēn	《暇》
<i>irü</i> gel	* <i>ir</i> ōl	<i>ör</i> ō	<i>jör</i> ōl	<i>jör</i> ēl	《祝福》

このように、オルドス方言では第2音節の長母音 **ō* に先行する **i* のすべて、および第2音節の長母音 *ō* に先行して、しかも語頭子音 **š* に続く **i* は既に「折れ」を蒙っていることがわかる。

これに関連して生じる新たな問題は、上掲の三方言に共通の推定祖形と蒙古文語形との関係、およびオルドス、ハルハ両方言に依然として存在している **u*ra (**ü*ge) に由来すると考えられる *ā* (*ē*) —— たとえば mo. *abu*rad = kh. ord. kalm. *aw*ād 《取って》等 —— の取り扱いに関する問題である。

3. ポッペ説の検討

ハルハ方言における、

1° **u*ra > *ō* (**ü*ge > *ō*),

2° **u*ra > *ā* (**ü*ge > *ē*)

という二通りの母音縮合について、ウラディーミルツォフは 2° を自生的な音変化とみなして 1° を「前進的円唇同化」によって説明しようとした。これに対してポッペは 1° を自生的な音変化とみなして、2° を次のような条件的音変化によって説明しようとした。

26) カルムイク方言中のエレット (Ölöt) 下位方言形。第1音節の母音 *ü* の由来は不明。

「**u*ra の **u* が語幹に, **a* が接尾辞に属す場合: **u*ra > *ō*.

それ以外の場合: **u*ra > *ō*.²⁷⁾」

このように, 1° **u*ra > *ō* (**ü*ge > *ō*) の母音縮合を自生的な音変化とみなせば, さきにわれわれが仮定した三方言に共通の祖形と蒙古文語の状態とは直接結びつくことになる。しかしながら, 2° **u*ra > *ā* (**ü*ge > *ē*) という母音縮合に関する上のような説明にも, 少なからぬ問題が含まれている。

それにはまず, 語幹と接尾辞の切れ目というような形態論的・意味的特徴が, 音変化の条件として作用しうるかどうかという方法論上の疑問が生じる。いわゆる「音韻対応の一定性」というのは, 意味とは無関係に調音にのみ関して起こる変化の規則性を確認した, 比較言語学における方法論的原則だからである。ソシュールはこれについて次のように述べている。

「音韻現象【=音変化】はまた, どんな種類の記号をもおそい, 形容詞, 実体詞, 等のあいだにも, 語幹, 接尾辞, 語尾, 等のあいだにも差別を設けないという意味において, 無限であり, 無数である。」²⁸⁾

ポッペがこのような方法論的原則をふまえたうえで, なおかつそれに対するアンチテーゼとしてさきのような仮説を提示しているとは考えにくい。

次に, 蒙古文語の *abu*rad 《取って》と *bolu*rad 《成って》の形態論的構成をみると, それぞれ *ab-*《取る》, *bol-*《成る》という動詞語幹に, 介入母音 *-u-* を介して副動詞形成接尾辞 *-rad* が接尾したものである。つまり *ab-u-rad*, *bol-u-rad* というように *u*ra の部分の形態論的切れ目は等しい。これらに対してハルハ方言では *awād*, *bolōd* と,

27) N. Poppe, "The groups **u*ra and **ü*ge in Mongol languages", *Studia Orientalia* XIV: 8, 1950, p. 4.

28) Saussure, op. cit., p. 209; 邦訳 213 頁。

互いに異なった長母音が対応していることから、この場合、形態素の切れ目が音変化の条件として作用していないことは明らかである。

上に述べたポッペの説明は、氏がその5年後に出版した *Introduction to Mongolian Comparative Studies* (1955) においてはもはや採用されていないので、さきの説に対する反論はこれで十分と考える。

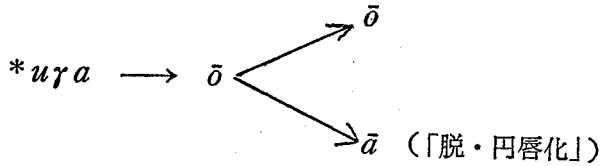
氏は、新しい著作で、第2音節以降の **uɣa* がハルハ方言では *ō* となるとしているだけで (p. 70f.), **uɣa* > *ā* という変化については特に論じていない。ただ、ハルハ方言形の *dzurgā* 《六》を *anomalous form* としていることからすれば、氏がハルハ方言における **uɣa* > *ā* をすべて「例外的な発展」とみなすに至ったと考えざるを得ない。

しかし、たとえそれらが音変化の「例外」とみなすべきものだとしても、そのような「例外」がどのようにして生ずるに至ったのかという点が明らかにされない限り、そのような説明をそのまま受け入れるわけにはいかないのである。

4. トムセン説の検討

トムセンは、ハルハ方言における **uɣa* > *ō* (**üge* > *ȫ*) という母音縮合を自生的な音変化とみなす点でポッペの考え方を継承している。しかし、もう一方の **uɣa* > *ā* (**üge* > *ē*) という母音縮合に関して、氏は、この変化が、**uɣa* > *ō* (**üge* > *ȫ*) という自生的な変化のあとで、第1音節の非円唇母音の影響による「脱・円唇化」の変化によって得られたとする仮説を提起した。²⁹⁾ これによれば、**uɣa* (**üge*) という連続はすべて、一旦、**uɣa* > *ō* (**üge* > *ȫ*) という発展段階を経たことになる。

29) K. Thomsen, "Die Entwicklung der Gruppe **uɣa* (**üge*) im mongolischen", *Acta Orientalia* 23, 1958, S. 263-267.



第2音節以降の \bar{o} (< * $u\gamma a$) は、ハルハ方言では第1音節の母音 o (< * $o, *i$) のあとでのみ保持され、他は「脱・円唇化」($\bar{o} > \bar{a}$) の変化を蒙ったが、カルムイク方言では第1音節の母音にかかわりなく、あまねく「脱・円唇化」を蒙った。さらに、13~14世紀に属するアラビア文字表記の蒙古語——ムカディマツト・アル・アダブ、イブン・ムハンナー、ライデン語彙等のいわゆる中期西部蒙古語も、この点に関してはカルムイク方言と同様であるという。³⁰⁾

ところがトムセン説によれば、蒙古文語形 *abuγad* 《取って》に対応するハルハ、カルムイク方言形 *awād* 等においても、次のようにすべて一旦長母音 \bar{o} の段階を経ているとせねばならない。

$$*abu\gamma ad > *ab\bar{o}d > aw\bar{a}d$$

このような **abōd* という中間段階は、実証的な裏付けをもつものではなく、理論的に仮定された段階であるが、**abuγad* と *awād* を結びつける中間段階としてはいかにも迂遠的な説明である。

つまり、他の母音縮合では前後いずれかの母音がただちに縮合後の長母音としてあらわれていることを考えれば、**abuγad* > *awād* はそのまま他の母音縮合と並行的にとらえることができるのに対して、ことさらにその中間に **abōd* という段階を仮定するのは不自然である。

さらに、トムセンは **uγa* > \bar{a} という音変化を「蒙古語共通の発展」としていながら、³¹⁾ 中期西部蒙古語と同時代のいわゆる中期東部蒙古語——すなわち、13~14世紀に属する漢字・パспа字蒙古語——の状態を

30) Ibid.

31) Ibid., S. 264.

全く考慮に入れていない。『元朝秘史』や『華夷譯語』等の中期東部蒙古語では、蒙古文語の *u \dot{y} a* に対して *u'a* および *o'a* という母音接続が、また蒙古文語の *ü \dot{g} e* に対しては *ü'e* および *ö'e* という母音接続が対応しているのである。

例：³²⁾

1) *u'a* および *ü'e*

<i>abu'at</i>	《取って》
<i>baru'an</i>	《暗い》
<i>qutu'ar</i>	《第3の》
<i>unu'atan</i>	《騎馬の》
<i>kidu'at</i>	《殺して》
<i>hiru'ar</i>	《底》
<i>bosu'at</i>	《起きて》
<i>yosu'ar</i>	《～によって》
<i>ergü'et</i>	《持ち上げて》
<i>gürü'et</i>	《到着して》
<i>kirü'e</i>	《鋸》
<i>hirü'er</i>	《祝辞》
<i>ögü'et</i>	《与えて》
<i>söyü'er</i>	《教訓》

2) *o'a* および *ö'e*

<i>dolo'an</i>	《七》
<i>no^qo'an</i>	《青草》
<i>olo'ar</i>	《大勢で》
<i>to^qo'an</i>	《鍋》
<i>širo'ai</i>	《土》
<i>dörö'e</i> (華)	《鐙》
<i>nökö'e</i>	《他の》
<i>ködö'e</i> (華)	《陸》
<i>edö'e</i>	《今》
<i>žilo'a</i>	
(~ <i>žilu'a</i>)	《手綱》
<i>žirqo'an</i>	
(~ <i>žirwa'an</i>)	《六》

32) (華)は華夷譯語(いわゆる甲種本)の蒙古語形、他は元朝秘史の蒙古語形をあらわす。華夷譯語は

A. Mostaert, *Le matériel mongol de Houa I I Iu* 華夷譯語 de Houng-ou (1389) I, Bruxelles, 1977.

により、元朝秘史蒙古語は

E. Haensch, *Wörterbuch zu Manghol un Niuca Tobca'an (Yuan-ch'ao pi-shi) Geheime Geschichte der Mongolen*, Wiesbaden, 1962,

I. de Rachewitz, *Index to the Secret History of the Mongols*, Bloomington, 1972. による。ただし転写方式は Mostaert に従った。

蒙古語における **uɣa* と **üge* の歴史を考えるうえで、このような中期東部蒙古語の資料は特に重要である。なぜなら、この時代の文献としては蒙古文語もアラビア文字表記蒙古語も円唇母音の *o* と *u* (また *ö* と *ü*) を表記し分けておらず、それらだけがこの区別を有するからである。

前掲の例にみるように、中期東部蒙古語において *o'a* は、ほとんどの場合、第1音節の *o* に後続する音節にあらわれているが、第1音節の *i* のあとにあらわれている語も若干みられる。注意すべきは、第1音節の *o* に続く音節で *o'a* のみならず *u'a* もあらわれていることであって、*o'a* と *u'a* が相補う分布をしているとはいえないことである。

要するに、蒙古文語の *uɣa* に対応する中期東部蒙古語の *o'a* と *u'a* が **uɣa* に由来するとしたら——これはウラディーミルツォフ、ポッペ、トムセン三氏に共通の前提であるが——**uɣa* が中期東部蒙古語で *o'a* と *u'a* に分岐的発展をとげるに至った音声的環境の違いを明らかにしなくてはならない。さもなければ、必然的に、中期東部蒙古語の *u'a* と *o'a* の対立が蒙古語のより古い状態を反映していると考えなければならないことになる。

5. 結 論

ウラディーミルツォフは、蒙古語における **uɣa > ā* (**üge > ē*) という母音縮合を自生的な音変化としてとらえたが、ハルハ方言における **uɣa > ō* (**üge > ȫ*) を「前進的円唇同化」によって説明しようとしたために、kh. *džolō*, *džorō* 等の第1音節の母音 *o* を一般的な逆行同化(「*i*の折れ」)の一環として説明することができなかった。

他方、ポッペおよびトムセンは、それを第2音節の長母音 *ō* に先行する **i* の「折れ」としてとらえたものの、**uɣa > ō* (**üge > ȫ*) という母音縮合を自生的な音変化とみなしたために、**uɣa > ā* (**üge > ē*) という音変化の説明に窮することになった。

これらのなかで、母音縮合に関してはウラディーミルツォフの説明が、また「*i* の折れ」に関してはポッペ・トムセンらの説明が、他の母音縮合や他の「*i* の折れ」と並行的な、より一般的な性質の音変化であることは繰り返し述べてきたところである。われわれはここで、上の二つの立場を統合することによって新しい説明を試みることにしたい。

問題となっている母音縮合に関して、現代諸方言に共通のそもそもの出発点の状態が蒙古文語の状態に反映されていると仮定しても、あるいは中期東部蒙古語の状態に反映されていると仮定しても、いずれにしても、「第1音節の *i* および *o* に後続する音節において、**uɣa* → **oɣa* (あるいは **u'a* → **o'a*)」という音変化を仮定すれば、母音縮合と「*i* の折れ」を規則的な音変化としてとらえることができるのである。

とりあえず、ここでは蒙古文語の状態を祖形と仮定すると（繰り返すが、中期東部蒙古語の状態に祖形が反映されていると仮定しても得られる結果は同じである）、

$$\begin{array}{l}
 *u\gamma a \longrightarrow *o\gamma a / \left\{ \begin{array}{l} *i \\ *o \end{array} \right\} C \text{ ---} \\
 *ü\gamma e \longrightarrow *ö\gamma e / \left\{ \begin{array}{l} *i \\ *ö \end{array} \right\} C \text{ ---}
 \end{array}
 \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

という音変化を考えるわけである。

さらに母音縮合としては、

$$\begin{array}{l}
 *u\gamma a \longrightarrow \bar{a} \\
 *ü\gamma e \longrightarrow \bar{e} \\
 *o\gamma a \longrightarrow \bar{o} \\
 *ö\gamma e \longrightarrow \bar{\bar{o}}
 \end{array}
 \left. \vphantom{\begin{array}{l} *u\gamma a \\ *ü\gamma e \\ *o\gamma a \\ *ö\gamma e \end{array}} \right\} \dots\dots\dots \textcircled{2}$$

というウラディーミルツォフの公式そのままが適用されれば、すなわちわれわれが 2. 2. で仮定したオルドス、ハルハ、カルムイク三方言に共通の祖形の状態が得られることになる。

さらに、そのあと、「*i*の折れ」として

$$\left. \begin{array}{l} *i \longrightarrow o / \text{--- } C\bar{o} \\ *i \longrightarrow \ddot{o} / \text{--- } C\bar{\ddot{o}} \end{array} \right\} \dots\dots\dots ③$$

および、カルムイク方言における第2音節以降の「脱・円唇化」変化

$$\left. \begin{array}{l} \bar{o} \longrightarrow \bar{a} \\ \bar{\ddot{o}} \longrightarrow \bar{e} \end{array} \right\} \dots\dots\dots ④$$

を考えることによって、それぞれの方言形の歴史が説明される。³³⁾ (カルムイク方言ではさらに $\bar{e} \rightarrow \bar{\epsilon}$ という変化が加わる。)

	①		②		③		④	
	↓		↓		↓		↓	
* <i>jilur̄a</i>	→	<i>jilora</i>	→	<i>dzilō</i>	→	<i>dzolō</i>	→	<i>dzolā</i> 《手 綱》
* <i>(h)irur̄ar</i>	→	<i>(h)iroṛar</i>	→	<i>irōl</i>	→	<i>jorōl</i>	→	<i>jorāl</i> 《底》
* <i>kirüge</i>	→	<i>kiröge</i>	→	<i>kirō</i>	→	<i>körō</i>	→	<i>körē</i> 《鋸》
* <i>čilügen</i>	→	<i>čilögen</i>	→	<i>tšilōn</i>	→	<i>tšölōn</i>	→	<i>tšölēn</i> 《暇》
* <i>dolur̄an</i>	→	<i>doloṛan</i>	→	<i>dolōn</i>	→		→	<i>dolān</i> 《七》
* <i>bosur̄ad</i>	→	<i>bosoṛad</i>	→	<i>bosōd</i>	→		→	<i>bosād</i> 《立って》
* <i>ködüge</i>	→	<i>ködöge</i>	→	<i>ködō</i>	→		→	<i>ködē</i> 《草原》
* <i>ögüged</i>	→	<i>ögöged</i>	→	<i>ögöd</i>	→		→	<i>ögēd</i> 《与えて》
* <i>abuṛad</i>	→		→	<i>abād</i>	→		→	<i>abād</i> 《取って》
* <i>barur̄an</i>	→		→	<i>barān</i>	→		→	<i>barān</i> 《暗い》
* <i>kür̄ged</i>	→		→	<i>kürēd</i>	→		→	<i>kürēd</i> 《達して》

なお、中期西部蒙古語の状態については、それが13~14世紀に属していることから、その状態がカルムイク方言と同様の一連の音変化を経て

33) カルムイク方言の歴史については、もうひとつの別の解釈も可能である：すなわち①の音変化のあと「折れ」の変化が続き、そのあとで $ora > \bar{a}$, $\ddot{öge} > \bar{e}$ というこの方言に独自の母音縮合が生じたとする考え方である。ただし、いずれも①の音変化を欠かすことができない点に注意。

得られたものであるとは考えにくい。そこではむしろ、独自の「脱・円唇化」が生じたと考えるべきであろう。

5.1. 若干の不規則な対応とその解釈

上に仮定した音変化①～④により、蒙古文語の第1音節の *i* に後続する *u* と *ü* は、ハルハ・オルドス両方言でそれぞれ長母音 \bar{o} と $\bar{\ddot{o}}$ が対応していることが期待される。ところが、蒙古文語の

ᠵᠢᠷᠢᠭᠠᠨ 《六》 (cf. 秘史 *ᠵᠢᠷᠭᠣ'ᠠᠨ* ~ *ᠵᠢᠷᠠᠪᠠ'ᠠᠨ*)
ᠰᠢᠷᠢᠭᠠᠳ 《入り込んで》 (cf. 秘史 *ᠰᠢᠷᠬᠤ'ᠠᠰᠤ* 《入り込めば》)
ᠰᠢᠳᠦᠭᠡᠨ 《信仰》 (cf. パスパ字³⁴⁾ *ᠰᠢᠳᠦ'ᠡᠨ*)

に対応するオルドス、ハルハ方言形は次のように長母音 \bar{o} ($\bar{\ddot{o}}$) を有していない。

ord.	kh.	kalm.
<i>dᠵurgā</i> (n)	<i>dᠵurgā</i> (n)	<i>zurᠶān</i> 《六》
<i>ᠰurgād</i>	<i>ᠰurgād</i>	<i>ᠰurᠶād</i> 《入り込んで》
<i>ᠰütēn</i>	<i>ᠰütēᠭ</i>	<i>ᠰütēn</i> 《信仰》

このような場合、蒙古語のより古い状態において第1音節の母音の交替 **i* ~ **u* (**i* ~ **ü*) があったと考えることもできよう。上の三方言の対応だけをみる限り、それらの共通の祖形として第1音節に母音 **i* をもつ形を推定する必要はないからである。

同時に次のような考え方も可能である。つまり、筆者はかつてハルハ方言とオルドス方言において「時代的に異なった2種類の折れ」が存在することを論証したが、³⁵⁾ 上の例において、より古い時代に属する「折

34) N. Poppe, *The Mongolian Monuments in ᠬᠦᠫᠦᠭᠠᠰᠤᠯᠠ Script*, Wiesbaden, 1957, p. 130.

35) 前掲拙論, 38-40頁。

れ」があらわれているとみる考え方である。その際、現代諸方言の第1音節の母音が *u*, *ü* であることから、後続する音節には **ura*, **üge* が存在していたと仮定しないわけにはいかない。

$$\begin{array}{l} *jirruyan \rightarrow \left(\begin{array}{c} \text{より} \\ \text{古い} \\ \text{折れ} \end{array} \right) \rightarrow *dzurruyan \\ *sirruad \rightarrow \left(\begin{array}{c} \text{より} \\ \text{古い} \\ \text{折れ} \end{array} \right) \rightarrow *šurruad \\ *sitügen \rightarrow \left(\begin{array}{c} \text{より} \\ \text{古い} \\ \text{折れ} \end{array} \right) \rightarrow *šütügen \end{array}$$

ところが、秘史・パスパ字蒙古語にみえる *jiro'an* の *o'a* は上の祖形と合致しないから、われわれは祖語の段階において **jirruyan* ~ **jiroyan* という交替形の存在を仮定しなければならない。ちなみに秘史および華夷譯語にあらわれている《六》をあらわすもうひとつの形 *jiro'an* は **jirruyan* の系統を反映するものとみなすことは無理ではないと考える。

次に、オルドス方言形 *ilō* 《虻》に対しては、**ilura* という祖形を考えることができる。これは元朝秘史の *hilu'atu* - 《虻にさされる》によっても支持される。しかし、ハルハ方言形 *jalā* 《蠅》およびカルムイク方言形 *ilāsñ* ~ *ilēsñ* 《蚊》は上の対応と合致しない。

このような対応からポッペは **hilura* ~ **hilaya* という祖語における交替形の存在を仮定しているが、³⁶⁾ オルドス方言形とハルハ・カルムイク方言形の対応が、他の規則的な対応からはずれた独自のものであることを認識すれば当然の帰結としてわれわれもこれに従うのである。

最後に、蒙古文語形 *kiduṛad* 《殺して》(cf. 秘史 *kidu'at*) に対応する現代方言形の対応をみると、

ord.	kh.	kalm.
<i>xudād</i>	<i>xjadād</i>	<i>kudād</i> ~ <i>kitēd</i> ~ <i>ketēd</i>

と、一様でない。オルドス方言形 *xudād* およびカルムイク方言形 *kudād*

36) N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki, 1955, p. 40.

は、「より古い時代の折れ」のあらわれとして考えることができよう：

*kidu- > *kudu- > kalm. kud-, ord. xudu-

筆者はかつて、ハルハ方言の *xjad-* について、**kidu-* という祖形が「不完全な折れ」を蒙って得られた形として解釈した。³⁷⁾しかし、蒙古文語 *kiduŋad* に対応するハルハ方言形が **xjodöd* でなくて *xjadād* であること、およびカルムイク方言形 *kitēd* ~ *ketēd* の存在を考えれば、ここでも **kidu-* ~ **kida-* という祖語における交替形の存在を仮定せざる得ない。

引用文献

- 栗林 均 「『*i の折れ』再説——ハルハ方言とオルドス方言の発展の平行性——」日本モンゴル学会『モンゴル研究』No. 13, 1982, 37-55 頁。
- 「蒙古語史における『*i の折れ』の問題点」『言語研究』82 号, 1982, 29-47 頁。
- 服部四郎「蒙古祖語の母音の長さ」『言語研究』36 号, 1959, 40-54 頁。
- Doerfer, G. “Langvokale im Urmongolischen?” *Journal de la Société Finno-ougrienne* 65, 1964, pp. 3-21.
- “Langvokale im Urmongolischen? II” *Journal de la Société Finno-ougrienne* 70, 1970, pp. 3-24.
- Haenisch, E. *Wörterbuch zu Manghol un Niuca Tobca'an (Yüan-ch'ao pi-shi) Geheime Geschichte der Mongolen, Wiesbaden, 1962.*
- Lessing, F. D. et al., *Mongolian-English Dictionary*, Bloomington, 1973 (corrected rpt.).

37) 拙論「『*i の折れ』再説——ハルハ方言とオルドス方言の発展の平行性——」日本モンゴル学会『モンゴル研究』No. 13, 1982, 52-53頁。

- Meillet, A. *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, Paris, 1937⁸.
- Mostaert, A. *Dictionnaire Ordos*, New York / London, 1968 (rpt.)
 — *Le matériel mongol du Houa I I Iu* 華夷譯語 de Hung-ou (1389) I, Bruxelles, 1977.
- Poppe, N. "Stand und Aufgaben der Monglistik" *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 100, 1955, S. 52-89.
 — "The groups **uγa* and **üge* in Mongol languages" *Studia Orientalia* XIV : 8 1950.
 — *Grammar of Written Mongolian*, Wiesbaden, 1954.
 — *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Mémoires de la Société Finno-ougrienne 110, Helsinki, 1955.
 — *The Mongolian Monuments in ᠬᠦᠯᠠᠭᠰᠤᠯᠠ Script*, Wiesbaden, 1957.
 — "On the velar stops in the intervocalic position in Mongolian" *Ural-Altäische Jahrbücher* Bd. XXXI, 1959, S. 270-273.
 — *Introduction to Altaic Linguistics*, Wiesbaden, 1965.
- Rachewiltz, I. de *Index to the Secret History of the Mongols*, Bloomington, 1972.
- Ramstedt, G. J. "Das Schriftmongolische und die Urgamundart phonetisch verglichen", *Journal de la Société Finno-ougrienne* XXI : 2, 1903.
 — *Kalmückisches Wörterbuch*, Helsinki, 1976 (rpt.)
- Saussure, F. de *Cours de linguistique général*, Paris, 1916.
- Thomsen, K. "Die Entwicklung der Gruppe **uγa* (**üge*) im Mongolischen" *Acta Orientalia* 23, 1958, pp. 263-267.
- Владимирцов, Б. Я. «Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия, Введение и фонетика» Ленинград, 1929.
- Лувсандэндэв, А. «Монгольско-русский словарь» Москва, 1957.
- Санжеев, Г. Д. «Сравнительная грамматика монгольских языков, Том I» Москва, 1953.

The developments of **uɣa* and **üge* in Mongolian

Hitoshi KURIBAYASHI

It is generally admitted that the sound sequence **uɣa* (**üge*) has developed in Khalkha Mongolian into the two long vowels: \bar{o} ($\bar{\ddot{o}}$) and \bar{a} (\bar{e}). Different explanations have been given as to the cause of this divergent development.

Vladimirtsov regarded the contraction **uɣa* > \bar{a} (**üge* > \bar{e}) as a general development and **uɣa* > \bar{o} (**üge* > $\bar{\ddot{o}}$) as the result of progressive labial attraction. This, however, cannot be applied to such Khalkha words as *džolō* «rein», *džorō* «amble» etc. which originally had the vowel **i* of the first syllable. Because, if we take into consideration the Ordus forms *džilō* «rein» and *džirō* «amble», it is most probable that the first vowel of Khalkha *džolō* and *džorō* has been brought about by the breaking of **i* into *o* under the influence of the following \bar{o} .

On the other hand, Poppe and Thomsen considered the contraction **uɣa* > \bar{o} (**üge* > $\bar{\ddot{o}}$) to be a general development, which is, in its turn, inconsistent with other vowel contractions in Mongolian: e. g. **aɣa* > \bar{a} , **aɣu* > \bar{u} , **uɣu* > \bar{u} , **oɣa* > \bar{o} etc. As a result, they had either to take **uɣa* > \bar{a} (**üge* > \bar{e}) for an exception to the sound change or to assume a roundabout development such as **abuɣad* > **abōd* > *awād* «having taken».

The present author assumes at the early stage of development the sound change **uɣa* > **oɣa* (**üge* > **öge*) after the vowels **o* (* $\bar{\ddot{o}}$) and **i* of the first syllable, only by way of which we can accept the followings as regular sound changes in Mongolian:

1. the vowel contractions **uɣa* > \bar{a} , **üge* > \bar{e} , **oɣa* > \bar{o} , **öge* > $\bar{\ddot{o}}$,
2. the breaking of **i* into *o* ($\bar{\ddot{o}}$) before \bar{o} ($\bar{\ddot{o}}$).

The long vowel \bar{a} (\bar{e}) in Kalmuck (e. g. *džolā* «rein», *džorā* «amble») should be explained either by the relaxation of the rounded vowel \bar{o} ($\bar{\bar{o}}$) or by the contraction $*o\gamma a > \bar{a}$ ($*\bar{o}ge > \bar{e}$) peculiar to this dialect.

(原稿受理日 昭和58年7月25日)